



Title	言い訳の日タイ対照研究
Author(s)	Sopitvutiwong, Yuphawan
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【3】

氏名	ソーピットウツティウォン ユパワン SOPITVUTIWONG YUPHAWAN
博士の専攻分野の名称	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	第 26136 号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学位論文名	言い訳の日タイ対照研究
論文審査委員	(主査) 准教授 筒井 佐代 (副査) 教授 鈴木 睦 教授 宮本 マラシー 教授 真嶋 潤子 教授 堀川 智也

論文内容の要旨

一般的に人々は、社会生活を送る上で、なるべく問題を起こさぬよう心がけている。しかし、いく

ら気をつけても、問題が生じてしまう場合が少なくない。その際、当然被害を受けた側（以下「被害者」と呼ぶ）に不快感や不満な気持ちを与えてしまうため、被害を及ぼした側（以下、「加害者」と呼ぶ）または及ぼしたと疑われる側は、何らかの方法で相手との関係を修復しようとする。日本社会のように謝罪という行動が優先的に求められる社会に住む日本人は、謝って関係修復を試み、謝罪だけでは足りない場合には、被害が起きた原因の説明（本稿では「言い訳」と呼ぶ）を行う。ところが、筆者の国であるタイ社会は、日本社会とは異なり、謝罪は不可欠だが、それよりもなぜ被害が起きたのかについて言い訳することが優先される。このようにそれぞれの国には、独自の社会規範が存在するため、異文化・異習慣の社会に住むことになった場合、まず、その社会の文化や習慣を理解する必要が出てくるのである。本稿は人間関係にそうしたトラブルが起きた状況での言語行動に着目し、日本語母語話者（以下「JP」と呼ぶ）とタイ語母語話者（以下「TH」と呼ぶ）がトラブルをめぐってどのような行動を取るかを明らかにすることが目的である。

上記の目的を達成するため、本稿では日常的に起こり得るトラブルの状況として、①待ち合わせに遅刻したという「時間」と、②相手の物に損傷を与えたという「物」の場面を取り上げ、JPとTHの言い訳の使用がそれぞれどのような特徴を持ち、またどのように異なるかを明らかにし、ひいては言い訳の会話に反映される両言語母語話者の責任感のあり方を考察する。

本稿の調査は、20代のJPとTH、女性同士8組、計16組（＝32名）を対象に、ロールプレイ調査とロールプレイ後、各場面で調査対象者が取った行動についてフォローアップインタビューを行った。ロールプレイの設定条件は、「時間」と「物」に関するトラブルの状況を、それぞれ間接状況（「直接的に自分の行動によらない原因で被害を与えられた場合」と、直接状況（「直接的に自分の行動による原因で被害を与えた場合」）に二分し、さらに、被害の程度を軽重に分けた。また、相手との関係は、同等の相手に限定したが、その距離を「親・疎」に分けて考察した。

分析にあたっては、文字化したロールプレイデータを用いて、会話を「言い訳」の段階と、「問題解決」の段階に分けた上で、すべての発話に発話機能を割り当て、会話全体の発話の連鎖を分析した。特に、「言い訳」の段階について詳細に分析を行い、言い訳の発話タイプの分類、言い訳の内容、そして、言い訳に対する反応についても考察した。さらに、状況によって、生じた問題をどのように解決するかという問題解決の段階まで続く会話があったため、本稿はこの問題解決の部分を中心に責任の取り方についても考察したい。

調査の結果は以下の通りである。

①会話全体の流れについて

言い訳タイプの使用は、相手の所有物に被害が生じた「物」の場面では、自分の非の有無を問わず、JPとTHの結果は同様で、加害者が自ら言い訳をする〔自発的言い訳〕が最も多かった。これは、相手から借りた物に何が起こったかは加害者にしか分からないためであると考えられる。一方、待ち合わせに遅刻した「時間」場面でも、共に〔自発的言い訳〕が最も多かったが、THの場合は〔【文句】に対する言い訳〕の使用が、被害の軽重いずれにおいても見られた。

言い訳会話の流れは、JPは「時間」状況も、「物」状況も、被害の程度により流れが少し異なる。例えば、遅刻場面ではほとんどの会話は第一発話に【謝罪】がよく用いられているが、重い状況になると、第三者（＝作家）に配慮するような発話も観察された。また、会話の終わらせ方にも違いが見られ、被害程度の軽い場合は【謝罪】で会話を終了させるが、被害程度が重くなると、問題解決の段階まで続ける会話が多い。それに対して、THは被害の軽重いずれの状況においても、加害者の発話の種類が豊富で、また言い訳に対する被害者の反応も、肯定的な反応と否定的な反応の両方が使用されているという流れになっている。さらに、会話の終了部分では、軽重のいずれの状況においても同じような問題解決の方法を使っており、JPと異なる結果であった。

②加害者が使用する言い訳内容及びその言い訳に対する被害者の反応

加害者が使用する言い訳の内容は、JPとTHの間で結果が大きく異なる。JPは自分に非があるか否かにかかわらず、多くの調査対象者が〔正直に言う〕言い訳を選択した。それに対して、THは内容の選択が、その原因が自分に起因するかどうかによって異なっている。つまり、交通事情、雨のような自分の行動によらない場合、THの調査対象者はその原因を〔正直に言う〕言い訳を選択したが、その原因が自分にある場合、〔正直に言わない〕言い訳を選択した人が多かった。

また、【言い訳】を行う際、JPとTHがとる言語行動に違いが見られた。JPは、被害の原因が自分にあるか否か、また被害の程度の軽重に関係なく、【謝罪】、【自己非難】など非を認めるようなもの、あるいは第三者に配慮するような【心配の表明】、【後悔】などと一緒に言い訳を用いる。一方、THは自分に非があるかどうかによって【言い訳】を行う際の発話が異なる。すなわち、自分に非がなければ、相手との関係を改善しようとしてタイ語母語話者の言語行動の特徴の一つである【冗談】を言ったり、【責任の回避】や【責任の軽減】などを言ったり、自分に非がないことを主張しようとする。しかし、自分に非があると、【努力の表明】、【悪気なしの表明】、【責任の軽減】など自己防衛の発話を用いる傾向がある。

言い訳に対する被害者の反応も、JPとTHの間で結果が食い違っている。JPはいかなる状況・相手に対しても、【理解】、【受け入れ】のような肯定的な反応を示す傾向があるのに対して、THは親疎関係によって反応が異なり、疎の相手には受け入れの反応を示すが、親の相手には、否定的な反応をよく用いる。タイでは親しさを表すのに、どれだけストレートに物事が言えるかが一つの基準になる。そのため、親の相手にはたとえ否定的に聞こえても、今後も関係を維持していく上で、不満などを率直に表すことが大事とされる。つまり、THの被害者が親の相手に対して否定的な反応をするのは、親しい関係であることの象徴であると思われる。反対に、疎の相手にはそれほど深い付き合いが期待されず、何かトラブルが起きたとき、とりあえずその場を繕っておけばいいと考えるため、疎の相手に対してTHは無難な反応、つまり受け入れの反応を示すことが多いのである。しかし、受け入れの反応を示すとはいえ、やはり不満の程度が甚だしい時にはそれを伝える必要がある。そこでTHは直接的ではなく、間接的に遠まわしに相手に不満を伝える【皮肉】という方法を使う。この意味で【皮肉】の使用というのはTHの特徴の一つであると言える。

また、今回の調査では、両言語で「正直に言わない」言い訳の使用が見られたが、使われ方は異なっている。JPの場合、「正直に言わない」言い訳の例として、「曖昧な表現の使用」という方法が挙げられるが、THの場合、「渋滞があった」などの「ステレオタイプのな言い訳の使用」の他、「第三者への罪の押し付けの使用」という方法がよく見られて興味深い。特に、THで第三者への罪の押し付けが顕著に見られることについては、タイの社会事情に説明を求めめる必要がある。日本では、人に被害を与えたとき、その被害について謝罪をして責任を取ることが期待され、謝罪さえすれば社会ないし世間から許されやすくなる。それに対して、タイでは、与えた被害に対して謝罪をすれば、社会ないし世間から許しや理解をするより、まずその被害相応の弁償を問う傾向があり、場合によっては必要以上の弁償を要求することもある。そのため、加害者は、不当な責任追及を恐れ、第三者へ罪を押し付ける方法を取ってそれを事前に防ごうとするのではないと思われる。

上記の結果のように、何か問題が生じたとき、たとえ自分に非がなくても、「とりあえず謝っておく」ことがJPにとっては何よりも大事だと考えられる。相手に謝れば許してもらえる場合が多いと予測されるため、多くの加害者が率直に非を認め、それに対して被害者も受け入れの反応で返すのではないと思われる。一方、THの結果は「ナー」、つまり、顔、ないし面子を非常に大事にしたゆえの結果であると考えられる。すなわち、素直に非、特に自分の行動による非を認めたら、相手にひどく非難されて面子をつぶされ、辱められかねない。そうなれば自分の信用にもかかわってくる。そのため、タイ人は自分の非ではないことを主張しようとしたり、第三者へ罪を押し付けたり、ステレオタイプを使用したりして自分の面子を保つことを優先するのである。とはいえ、THが非を認めない、あるいは自分に非がないことを主張するからといって、決して責任を取らないわけではない。発生した問題に対してJPは最初に謝罪するという形で責任をとるが、THは積極的に具体的な案を出すことで責任を取る姿勢を見せていると言えよう。

この結果からも明らかのように、背景にある文化あるいは習慣などの違いによって、当然それぞれの社会における考えや行動のパターンが異なる。したがって、自分が属している社会の行動パターンと異なるものに遭遇したとき、決して自国文化の基準のみに照らし合わせて考えるのではなく、相手の文化の行動を理解しようとするのが、友好的な人間関係を構築・維持していく上で重要であると、本稿の結論から言えるのである。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、日本語とタイ語の言い訳の会話の対照研究である。近年、日本語の言語行動に関する研究は盛んになってきているが、言い訳に関する先行研究は少なく、また他言語との対照研究、特にタイ語との対照研究はごくわずかである。本論文は、言い訳という言語行動の分析を通して、日本語とタイ語の背景にある文化や社会の違いを明らかにしようとした、意欲的な研究である。

本論文では、研究方法としてロールプレイの手法を用いて、日本語母語話者（JP）とタイ語母語話者（TH）によるデータの収集を行っている。ロールプレイの場面設定の要因として、最も重要なのは、言い訳をする際、正直に言うか言わないかという言い訳の内容の観点である。この二種類の内容について、それぞれ、言い訳をするべきトラブルの場面として、遅刻という「時間」の場合と、相手の物に損傷を与えたという「物」の場合の二種類の場面を設定し、それぞれの被害の程度を軽重に分けて設定している。また、会話者の関係は、同等の相手で、親

と疎の両方を設定しており、その結果、計16の場面について、各言語でのロールプレイヤーデータを収集している。収集したデータは、会話分析の文字化の方法を用いて詳細に文字化されており、これだけの量の文字化データを収集できたことだけでも、この研究には意味があると言える。分析に際しては、すべての発話に発話機能を割り当てた後、会話の構造、および言い訳の内容とそれに対する反応の仕方の観点から分析し、両言語の対照を行っている。

本論文で明らかになったことのうち、主要な点を挙げておく。まず、会話の流れについては、加害者の方が「自発的言い訳」をするのが、両言語で主であったが、THの場合は、被害を受けた側がまず文句を言い、それに対して言い訳をするという方法が特徴的に用いられる。これは、THは、率直にものが言えることが、親しい関係であることの一つの基準であるためであると、筆者は述べている。

言い訳に対する反応については、JPはおおむねそれを理解し受け入れる反応をするが、THは、親しい相手には【文句】、親しくない相手には【皮肉】など、否定的な反応をする傾向が見られた。

また、会話の終了の仕方について、JPは被害の程度が軽い場合は【謝罪】で会話が終了するが、被害の程度が重い場合は、問題解決の段階まで会話が続く。これに対して、THは、被害の軽重いずれの状況においても、具体的な問題解決を提示して会話が終了する傾向がある。この点については、JPはまず謝罪をすることで非を認め、責任を取る姿勢を示すが、THは具体的な問題解決案を提示することで責任を取る姿勢を示すのだと述べられている。THが具体的な解決を好むことについては、他の研究でも指摘されており、JPとTHの行動の仕方の一つの大きな違いとして、興味深い指摘である。

本論文での分析の重要な論点である、言い訳を正直に言うかどうかについては、JPとTHで異なる傾向が指摘されている。JPは自分に非があるか否かにかかわらず、多くの事例で「正直に言う」結果が出ているが、THは、自分に非がない場合は「正直に言う」が、自分に非がある場合は「正直に言わない」という結果であった。このことに加えて、JPは、正直に言った上で【謝罪】【自己非難】などを行うが、THは、自分に非がなければ、自分はやっていないという【責任の回避】や、自分は約束どおりに行動したと主張する【責任の軽減】などの発話を行う。また、自分に非がある場合は、THは、わざとではないという【悪気なしの表明】や、がんばったという【努力の表明】などを行って、自己防衛する傾向が見られた。

本論文は、これらの日本語とタイ語の責任の取り方の違いについて、文化的な背景からの要因を考察することであり、言語行動に直接関わるレベルの行動規範などを用いた方が、説得力のある議論とされたであろうが、多くの先行研究は言語現象の指摘に留まっていることを考えると、本論文は、筆者の高度な日本語能力に加え、緻密な分析力と論理性に支えられた研究であり、日本語とタイ語の会話の対照研究において、今後の研究の指針ともなるべき論文である。上述したような問題はあっても、本論文が大変優れた論文であることは明らかである。以上の論文審査の結果を踏まえ、当該博士論文が本学において博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準に達したものと判断し、五名の審査委員が全員一致で合格と結論づけた。